

偉大な横綱と異常な大関 背後に時代の節目がにじり寄る
～大相撲九州場所観戦印象雑記～

<1> ついに達成 白鵬32回目の優勝

予想通りという人もいるかもしれないが……。6日目に高安に敗れ、若干の不安定さも露呈した白鵬は星ひとつ先行した鶴竜が並走し、「もしかしたら……」という期待も持たせてくれた場所だった。

とは言えども立て直しの巧さ、鋭い立ち合い、素早い判断と行動、「機を見るに敏」という表現がぴったりの攻めが復活して千秋楽にもつれ込んだ賜杯争いを制した。

歴代の鉄人（哲人）と比べて見ても「休場がない力士」という点では光っているこの横綱、ことによると優勝40回以上は達成してしまうかもしれない。

立ち合いの第一歩目の踏み出しとその時の腰の低さ（膝の深い曲がり）、二歩目以降の見事な摺り足、相手を見て離さない二つの眼、終始腰が伸びあがることのない重心の低さ、寄り身への反発力を上手く利用した各種の投げ技、どれをとっても素晴らしいの一語に尽きる。

この力士を破るのには、さらに上回る速さで矢継ぎ早に攻めるか、両まわしを一切やらず頭を付けて横から攻めるか位しかないだろう。

千秋楽の優勝者インタビューで、止まらない涙をぬぐいながら言葉を選んで語る受け答えが印象的だった。

◆白鵬の記録と大鵬の記録

	通算場所数	通算成績	幕内場所数	幕内成績	幕内優勝	備考
白鵬	82	880勝 186敗 21休	63	786勝 138敗 21休	32回	継続中
大鵬	87	872勝 182敗 136休	69	746勝 144敗 136休	32回	

<2> なんじゃこの大関は

白鵬が大鵬に追いつくか、新関脇逸ノ城、遠藤は壁を破れるかななどが話題の中心で、場所前のおおかたの予想や話題に大関の名前はあまり登場しなかった。

開けて見れば……。三人の大関の内二人は負け越し、辛うじて稀勢の里だけが優勝争いに絡んではいたものの後半戦に入る前に脱落。またしても落胆の大関陣だった。

稀勢の里の相撲ぶりは、この何場所か見たことがないような落ち着きを見せていた。相変わらずの腰高ではあるが、摺り足での鳥を追うような体の運びと常に相手を正面に置いての落ち着いた素早い対応が目立った。ことによると一皮むけかかっているのかなと思わせたが、後半戦になって徐々に落ち着きが見られなくなってきた。終わって見たら11勝4敗は悪い成績ではないが、碧山と魁聖に負けることなく13勝2敗で千秋楽まで賜杯争いに参加してもらいたかった。もしも稀勢の里の相撲が本当に変わろうとしているのだとしたら、来場所に注目したいと思う。

豪栄道・琴奨菊は惨憺たる成績でコメントのしようもないし、したくもない。大関が5人もいた時には二人位出来が悪くても目立たなかったかもしれないが、三人のうちの二人では隠しようもない。今となっては、稀勢の里が抜け出して横綱になってしまうと大変なことになってしまうというのが正直なところだろう。

6場所ぐらいの安定度を確認せずに大関に昇進させているので、こういう結果になるのかもしれない。

<3> 二人とも勝ち越した関脇陣

鳴り物入りで新関脇の座に就いた逸ノ城と、気がついたら関脇になっていたという感じの碧山。

マスコミは逸ノ城・逸ノ城と騒ぎ立てていたが、私自身の読みとしては高い壁に阻まれてさほど注目には値しないだろうと見ていた。ところがなんと14日目に稀勢の里を破って勝ち越しをしてしまった。千秋楽を終えて8勝7敗という結果だったが、自分より格下の者に負けたのは照ノ富士戦と栃煌山戦だけだった。星の数だけで評価すると表面的なところに留まってしまうので、少々内容についてコメントして見る。

鋭い立ち合いから攻めまくって勝つケースより、受けて立って守りの中から勝機をうかがう相撲の方が多いことが第一番目の特徴である。身長が高く体重が重い上に、足腰が強く重心が低いので攻められにくいのが二番目の特徴。相手の圧力を利用した投げ技よりも、自分の腕力からの投げ技の方が多いのが次の特徴。やや下がりながらの相撲が目立つのも気になる所である。

従って、白鵬や好調な時の日馬富士のように立ち合いに鋭い踏み込みがあって矢継ぎ早の攻めが繰り出される力士には弱いように感じられた。今のままだと相手力士が対応策を研究してくるので、長続きはしないだろう。これだけの体躯を利してさらに上を目指すなら、鋭い立ち合いからの攻め型の相撲に切り替える必要がある。

碧山は、話題にもならず周囲の喧騒からも遠く離れていたが、目立たぬところでいつの間にか星を稼いで、千秋楽に勝ち越してしまった。極端な腰高でしかも膝の怪我をした後膝の曲がり具合がさらに悪くなった。この先を危ぶんでいたなら、前進に徹する相撲に変わってきた。巨体を使って体重をかけた突き押しは威力があり、横綱大関を苦しめることもできるが、脇から下がら空きなので捕まえられたら何もできない。いかにして先に相手陣地に踏み込んで行くかがカギで、今場所の成績と内容が見事に物語っている。

<4> 新小結はつらい

小結は関脇・大関もしくは横綱への登竜門で、苦しみながらここを通過することで心技体が鍛えられる。今場所は東西の小結がそろって負け越しとなったが、6勝9敗の西小結勢の相撲には成長の跡がうかがえた。前半戦は上位との取り組みが続き1勝7敗で早くも撃沈かと思われたが、後半見事に持ち直したのは地力がついてきた証拠だろう。右差し左上手の型ができるとスピードもあり、土俵際の粘りもある。やや深めにまわしを取る癖があったが、少しずつ浅い位置を取れるようになってきている。今場所新小結で跳ね返されはしたが、やがてさらに上の地位を狙うことができるだろう。

東小結の豪風は体調不良か、ここ数場所の活躍の疲れが出たのか、まったく振るわなかった。僅かにあげた二つの白星のひとつは大関豪栄道からのものだが、これとて大関が不振だったことによると思えるので、総じて「豪風らしさ」が出せずに終わった場所だった。

毎場所色々な顔ぶれが見られる小結の座、上がっては跳ね返され、再び上がっては落ち……。ある時は今をときめく若手であったり、またある時は何度目かの挑戦であったり、古参力士の初登場であったり、様々なドラマがあって面白い。来場所は栃煌山と高安だろうか、楽しみである。

<5> 怪我からの復活

膝の大怪我で幕下50枚目台まで陥落した栃ノ心、十両で二場所連続優勝して再入幕を果たした。この場所は久しぶりの幕内の土俵で、しかも西前頭8枚目の位置でどこまでやれるか心配しながら注目する存在だった。何と優勝争いの一角にも名を連ね、11勝4敗の好成績で敢闘賞を獲得。復帰・復活した栃ノ心の相撲は大きく変わっていた。これまでの乱暴に上や横からガバッとまわしを掴んで力任せに振り回す相撲が消えて、鋭い踏み込みで浅いまわしを取って速攻で攻め立てるという理にかなった相撲のスタイルに変わっていた。腕力(かいなちから)があるので、前まわしを掴んで突っ走られると相手は浮き上がってしまう。前に出れば怪我はしにくい、下がりながらとる相撲は怪我のもとと良く言われるが、まさにその通りの結果が出た。来場所は元の位置である幕内上位に戻る所以楽しみな存在である。

網膜剥離の手術で休場した妙義龍は東前頭11枚目まで陥落した。前半戦はまだ体の動きがぎこちなく、ふらついているような土俵だったが、日を追って妙義龍らしさが散見するようになり、後半は疲れも出ていたようだが彼本来の秀麗な土俵が数多く見られた。

この二力士以外にも琴勇輝など怪我からの復帰をかけた力士は何人かいたが、新たに嘉風・大砂嵐が怪我をして途中から休場した。この二人は場所中に復帰していたが、完治を遅れさせることにならないだろうか。

<6> 平幕で目立った力士達

殊勲賞は高安、白鵬が大記録を達成した場所でただ一つの黒星をつけて優勝争いを面白くしたので文句のな

いところだろう。今場所の高安の相撲には勢いと自信が感じられた。無表情な素振りは相手に手の内・心の内を読まれにくく得をしている。突き押しよし、回しを取ってもよし、粘り腰もありで期待できる部分が多いが、場所ごとにも日ごとにも波があり過ぎるのがこれまでの印象。今場所の 10 勝 5 敗をきっかけに三役復帰と定着ができるようになると面白くなるに違いない。

遠藤はまだトンネルの中を右往左往しているのか、と感じさせるような前半の哀れな相撲が続き、殆どの人が今場所もこのままで終わりかと思った。ところが、前半戦では方針が定まっていないかのようなあやふやな立ち合いで見せ場もなく終わっていたが、後半になると立ち合いに大きく踏み出す白鵬のような低い踏み出しと素早い前みつ取りが光るようになり 8 日目から 8 連勝して 10 勝 5 敗で締めくくってしまった。

まだ発展途上のもがきの中にいる感じだが、いずれ時が解決するのだろう。

宝富士は地味な存在ながら毎場所少しずつ進化している。左四つのきちんとした自分の型が確立できており、その型になったら間違うことがないような正確な相撲をとる。この所一年位の間に立ち合いの攻撃力も身に着いて来て、少しずつではあるが目に見えるような変化をしてきている。部屋の横綱日馬富士の稽古相手をして鍛えられているのだろうか、今場所は東前頭 2 枚目という難しい地位で 8 勝 7 敗、やがて三役に定着できるような力士になる可能性も秘めている。

誉富士も宝富士と同じように伊勢ヶ浜部屋で鍛えられた力士の一人で、少しずつ力を付けているのが見える力士である。風貌も相撲っぷりも実直そのものというイメージで、豊真将と並ぶ「好感度の高い力士」だ。顎を引いてひたすら突き押しに徹する相撲はいずれ花開くと睨んでいた。二度目の入幕の今場所、西前頭 12 枚目での 8 勝 7 敗は評価して良いだろう。

旭天鵬が歩けばすべてが記録になってしまう。40 歳を越えた力士が 10 勝以上の星を上げたのは、歴史的に見ても大事件の部類に入る。基礎的なトレーニング（稽古）をきちんとやっているから怪我も少ない。軟らかな体がここまでを支えてきているようだが、土俵際の無理な相撲はめったに取ることはない。あと何場所ぐらい相撲を取れるのだろうか、この力士にとって毎日が記録の更新になっている。

八百長騒動で一旦は消えかかった蒼国来、復帰後いばらの道を歩んでいる感じだったが、徐々に昔の力に戻ってきたようだ。体の艶や筋肉の盛り上がりは復活したと言うよりも、それ以上のものになってきているように見える。足腰が良く手の力と手首のスナップが素晴らしいのがこの力士の特徴で、前みつの絶妙な場所を一度つかんだら絶対に離さないし、そこから繰り出す出し投げは見事なものである。今場所の成績は西前頭 14 枚目で 9 勝 6 敗、来場所は幕内上位の力士と顔が合う所まで躍進すると予想される。上位陣との取り組みがどんな展開になるのか楽しみな力士である。

<7> 熱戦 物言い そして行司の差し違い

この場所も熱戦が多く、土俵際のもつれから「物言い」がつく取り組みが多かった。熱戦を見られることで会場のお客様は喜ぶが、「何故物言いがついたのか」、「その結果がなぜこうなったのか」などの説明が不十分で観客がシーンとしたり野次が飛んだりすることもあった。

また別な視点から見ると、土俵際のもつれは両力士の真剣な勝負の結果として観客が喜ぶ反面、力士にとっては怪我のもととなりやすい。土俵下に転落した力士が自力で歩いて帰れなかったケースもいくつかあった。物言いがついた後、土俵上での協議の結果「行司差し違い」となる勝負がかなり目立った。

勝負の流れ次第では、行司は「どちらが勝者とも言い切れぬ」状況でもどちらかに軍配を上げなければならないという決まりになっている。それが物言いとなり、協議の結果逆転すれば、仮に行事に不手際がなかったとしても「行司の不手際」という扱いになってしまう。テレビ機材から見ていると、「これは行司にも判断はできないだろう」と感じられる取り組みに出会うことが少なくない。その昔あった「ヒゲの伊之助の涙の抗議」や「立行司の進退伺」を思い出す。

今場所あった差し違いのケースは、「行司のやんごとなき差し違い」と感じられる取組もあったが「行司の不手際」と感じられる取組もあったような気がする。審判部あたりできちんと分析されているだろうか。

以上

◆今場所の星取表は <http://www.sumo.or.jp/honbasho/main/hoshitori>